平成 21 年 12 月 10 日

横浜市インフルエンザ流行情報　10 号

横浜市健康福祉局健康安全課　／　横浜市衛生研究所

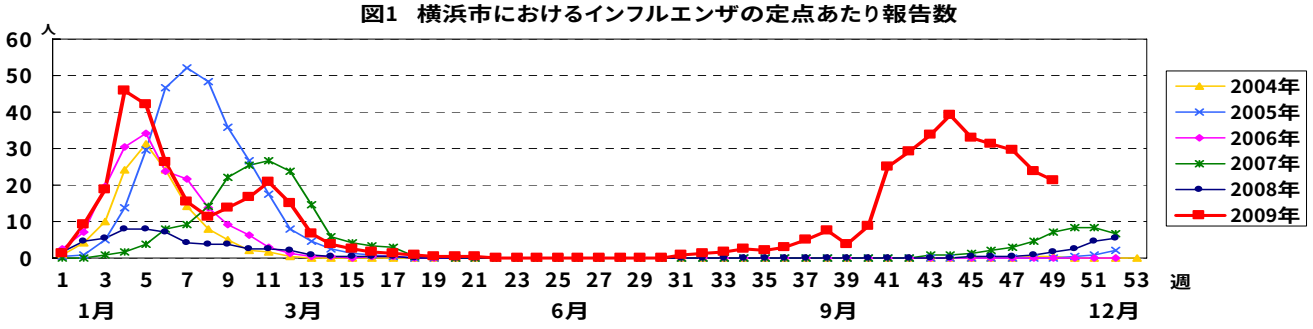
トピックス　流行状況は、5週続けて低下しています。

学校等の施設閉鎖状況も、施設数･患者数共に減少しています。

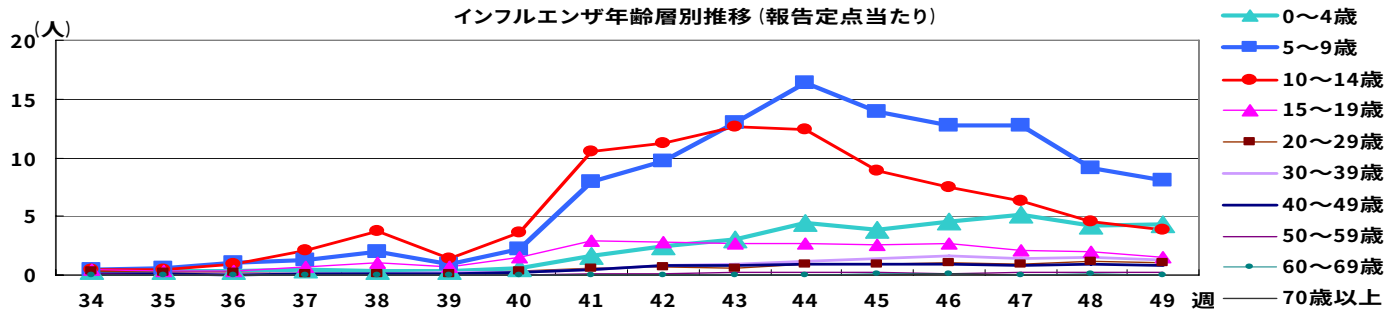
- 市内流行状況については、第 44 週（10 月 26 日からの週）には「定点医療機関あたりの報告数」（以下略す）が 39.18 でしたが、5 週続けて漸減し、第 49 週（11 月 30 日からの週）は 21.15 とピーク時の 54%と低下しています（図1）。
- 学級閉鎖等施設閉鎖の数も、第 42 週は 239 施設、対象患者 5513 人。第 44 週は 262 施設、4969 人。第 49 週では 92 施設、1030 人と、ピーク時に比べ施設数で 35%、患者数で19%と、減少しています。
- インフルエンザの病原体検出状況は、流行の目安を超えた辺りから、すべて AH1pdmのみです。
- 第 49 週の迅速診断キットでは、A 型が 2192 件、B 型が 9 件でした。
- 年齢層別推移では、各年齢層で概ね減少傾向です（図2）。
- 行政区別情報では、鶴見区と中区が共に 8.50 と低下しています。30 を超えたのは、磯子区 33.14 のみです（図3）。
- 11 月の入院サーベイランスは、251 件の報告があり、男性 155 人、女性 96 人でした。10 歳未満が 187 人（75%）、20 歳未満が 224 人（89%）、60 歳以上の入院は 12 人（5%）です（図4）。
- 基礎疾患は「なし･不明」が 147 人（59%）でした（図5）。そのうち 144 人（98%）は 20 歳未満で、50 歳以上は全て基礎疾患がありました。最も多いのは、糖尿病の 5 人で、その他がん、白血病等血液疾患、心不全、人工透析、脳梗塞等でした。20 歳未満で基礎疾患が見られたのは、80 人（35%）でした。喘息（寛解期を含む）が 58 人（73%）と最も多く、次は、先天性な疾患とてんかんがそれぞれ 7 人（9%）、その他鼻炎等アレルギーが 3 人、外傷が 3 人等です。
- 脳症（疑い含む）、人工呼吸器使用、集中治療管理といった重篤な状態となったものが 33 人（脳症 8 人、脳症疑い 2 人、人工呼吸器 16 人、集中治療管理 25 人―重複あり）でした。うち 26 人(79%)が 20 歳未満です。
- インフルエンザの流行は一山を超えたと思われます。しかし、今後基礎疾患のない 20 歳未満のこどもの重篤化への注意が必要です。これからは、感染性胃腸炎、RS ウイルス感染症等冬季のこどもの感染症が増える時期です。小児の重症化対応の確保のために、予防接種の勧奨と、軽症者は診療所を受診する等、症状による医療機関の選択受診が必要です。

1　市内 145 か所（小児科 88 か所含）の定点医療機関からの報告（図1）

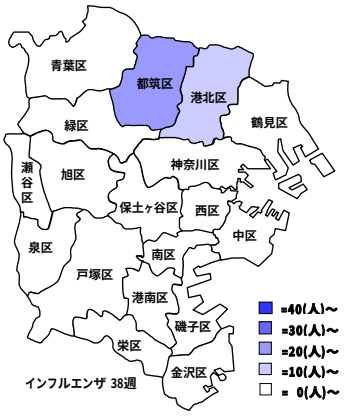
図1　横浜市におけるインフルエンザの定点あたり報告数

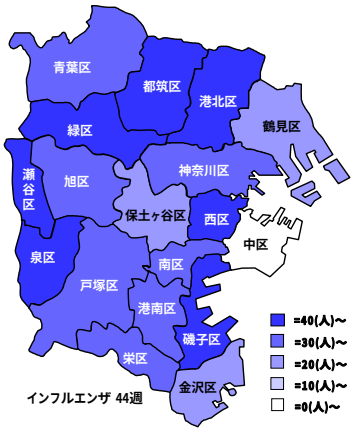


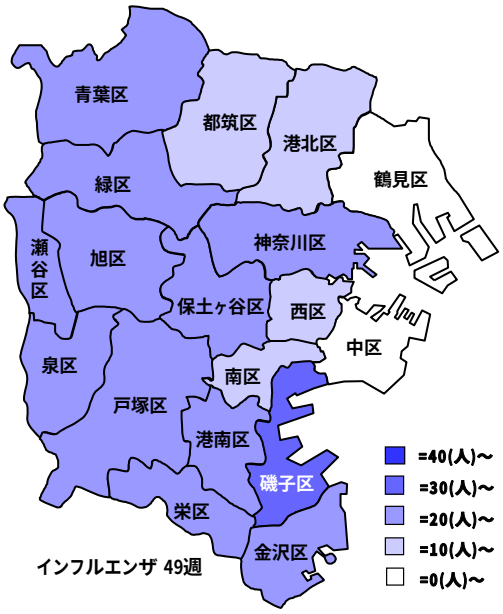
2　年齢層別推移（図2）



3　行政区別情報（図3）

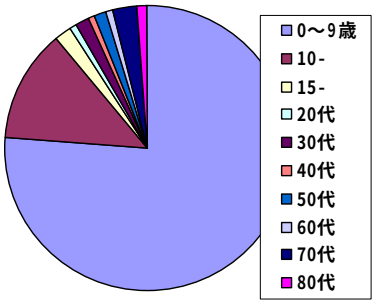




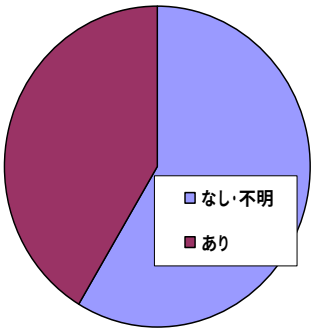


4　11 月の入院サーベイランス情報（251 人の内訳）

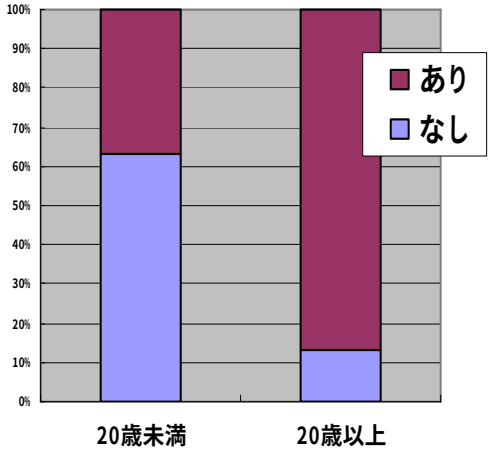
年齢内訳（図4）



基礎疾患有無（図5）

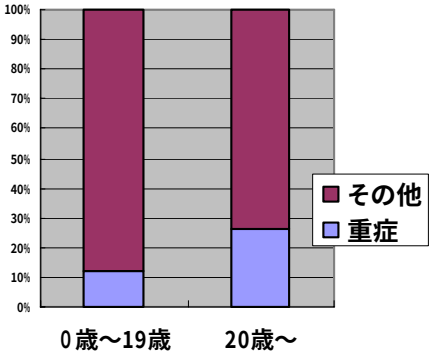


年代別の基礎疾患有無の割合（図6）



20 歳未満は 63%が基礎疾患なし
20 歳以上は 87%が基礎疾患あり

重症（重篤）の割合（図7）



20 歳未満は、20 歳以上に比べると、重篤の割合がやや低いのですが、患者実数は 20 歳未満が殆どなので、重篤患者数は 20 歳未満が殆どです。
入院した 20 歳以上は、殆どがある程度重い基礎疾患を有していましたが、20 歳未満は基礎疾患がない割合が高いです。
基礎疾患の無い 20 歳未満の重症化に気をつけましょう。

市内の状況については、 http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/report.html
全国の状況については、 http://idsc.nih.go.jp/disease/influenza/
全国の集団かぜの状況については、http://idsc.nih.go.jp/idwr/kanja/infreport/report.html **をご覧ください。**

【お問い合わせ先】　横浜市健康福祉局健康安全課　TEL045(671)2463
横浜市衛生研究所感染症･疫学情報課　TEL045(754)9816
同　検査研究課ウイルス担当　TEL 045(754)9804